

---

# Gendlin におけるメタファー観の進展

## Carrying Forward of Gendlin's Conception of Metaphor

---

岡村心平

関西大学大学院心理学研究科

Shimpei OKAMURA

Graduate School of Psychology, Kansai University

◆要約◆

心理療法におけるメタファーの機能は、Freudの『夢解釈』以来、現在でも重要なトピックのひとつである。特に、人間性心理学分野におけるメタファーの機能について考える上で、Eugene Gendlinのメタファー論を参照することは重要である。本論文では、Gendlinのメタファー観の推移を概観することを目的として、3つのテキストを挙げる。その3つとは、“*Experiencing and the Creation of the Meaning* (Gendlin 1962/1997)”、“*Let Your Body Interpret Your Dreams* (Gendlin 1986)”、“*Crossing and Dipping* (Gendlin 1991/1995)”である。これら3つのメタファー論を俯瞰した結果、時代の推移を経て、Gendlinのメタファー観、特に状況の捉え方に変化が見受けられた。この変化は、Gendlinのメタファー観のある種の「進展」と捉えられる。最後に、この状況の捉え方により進展されたGendlinのメタファー論が持つ臨床的な特徴について論じた。

キーワード：フォーカシング、メタファー、交差、夢フォーカシング、状況

### Abstract

The function of metaphor in psychotherapy is generally considered an important topic since the publication of Freud's *The Interpretation of Dreams*. In discussing the functions of metaphor within Humanistic Psychology, the metaphor theory of Eugene Gendlin is particularly significant. In this paper, the author reviews three articles for the purpose of investigating a shift in Gendlin's conceptions of metaphor. They are *Experiencing and the Creation of Meaning* (Gendlin, 1962/1997), *Let Your Body Interpret Your Dreams* (Gendlin, 1986), and “*Crossing and Dipping*” (Gendlin, 1991/1995). An investigation of these three articles on metaphor reveals a shift in Gendlin's conception of metaphor, particularly with regard to understanding the “situation.” The shift was regarded as a kind of “carrying forward” of Gendlin's conception of metaphor. Finally, the author argues that the clinical significance of Gendlin's conception of metaphor can be carried further by understanding the concept of the situation, as discussed.

Key word: Focusing, Metaphor, Crossing, Focusing Dreamwork, Situation

## はじめに

Freud, S. が *The Interpretation of Dreams* (Freud 1900) において夢の作業がもつメタファー的な特徴を示して以来、心理療法におけるメタファーの機能は現在も重要なトピックである。精神分析に限らず、家族療法 (Barker 1985) や認知行動療法 (Stoot, Mansell, Salkovskis et al. 2010) などの各諸学派の立場から、心理療法の統合的なアプローチ (吉本・中野 2011) まで、心理療法におけるメタファー研究は数多く報告され続けている。

同様に、パーソンセンタード・アプローチ (Person-centered approach) や体験的心理療法 (Experiential Psychotherapy) を含む人間性心理学の分野においても、メタファーはたびたび言及されてきた (例えば、Rennie 1998, Worsley 2012 など)。その中でも特に際立っているのが、フォーカシングの考案者である Gendlin, E. によるメタファー論であろう。Gendlin のメタファー論は、自身の専門である哲学分野での論文から心理療法の実践に関連する著作に至る広範囲に渡り、その年代に関しても 60 年代初頭からフォーカシングを考案した後の 80 年代以降の現在に至るまで、たびたび論じられている。

Ikemi (2005) が指摘しているように、Freud や Rogers, C. などある理論家について論じる際の難しさとして、その理論家の思考が年代を経るごとに「発展し続ける」という点を考慮しなければならない。これは Gendlin のメタファー論にも当てはまるだろう。特にフォーカシング (Gendlin 1981) に代表される、Gendlin 自身の実践活動の時期を契機として、Gendlin のメタファーに関する捉え方に何らかの変化が見受けられるかを検討することは、心理療法におけるメタファーの機能を考える上で重要である。

本論文では、Gendlin の著作や論文の中から “*Experiencing and the Creation of Meaning: ECM*” (Gendlin 1962/1997)、“*Let Your Body Interpret Your Dreams: LBD*” (Gendlin

1986)、“*Crossing and Dipping: CD*” (Gendlin 1995) の 3 つを取り上げ、メタファーに関する記述を示し、そのメタファー観の推移について概観することを目的とする。3 つのテキストの概略や成立経緯を挙げ、それらメタファー観を概観し、その推移について考察する。

## Gendlin におけるメタファー観の推移

### 1. ECM のメタファー観

#### (1) 概略・成立経緯

ECM は 1962 年に発表されたものであるが、これは 1958 年に Gendlin がシカゴ大学の哲学部に提出した博士論文を改定・改題した後に出版されたものである。田中 (2005) によれば、Gendlin は田中が「第一次シカゴ時代」と呼ぶ 1950 年から 1958 年までの期間に Rogers と出会い、シカゴ大学のカウンセリングセンターで臨床実践に従事していた。ECM はフォーカシングが考案される以前に成立した著作であり、一部には心理療法に関する記述が見受けられるが、理論的な記述がその分量の大部分を占めている。

#### (2) ECM のメタファー観

ECM においてメタファーという用語は、感じられた意味 (felt meaning) とシンボル (symbol) の 7 つの機能的関係の 1 つとして挙げられている。それらは、感じられた意味とシンボルに一対一対応がある平行的な機能的関係である「直接照合 (direct reference)」「再認 (recognition)」「展開 (explication)」と、非平行的で創造的な機能的関係である「メタファー (metaphor)」「把握 (comprehension)」「関連 (relevance)」「言い回し (circumlocution)」である。

ただし、非平行的な機能的関係である「メタファー」は、平行的な機能的関係である「直接照合」や「再認」を含む「高次の秩序」をもたらすものであり (Gendlin 1962/1997, p.115)、7 つの機能的関係はすべて同格に位置付けられるものではない。また、三村 (2011) が指摘する

ように、非平行的な機能的関係において中心的なのは「メタファー」と「把握」であり、「関連」は「把握」の機能を、「言い回し」は「メタファー」の機能を補完するようなはたらきをもっている (Gendlin 1997, p.137)。これらは互いに相補的な機能を持つ。

ECM における「メタファー」の機能は、以下のように説明されている。

A metaphor, then, contains two relationships between an “old” and a “new”: (1) some old (past) experience is affected so that a new felt meaning emerges from it, and (2) old symbols and their meanings are employed in a new way to conceptualize the new meaning (Gendlin 1962/1997, p. 113).

引用のように、「メタファー」という機能的関係は“古いもの”と“新しいもの”の間の2つの関係性を含んでいる。「メタファー」によって古い体験が影響を受け、その結果として新しい感じられた意味が生じる。古いシンボルとそれらの意味は、新しい意味を概念化するような仕方でも利用される。ECM における「メタファー」は、新しい感じられた意味を創造する機能的関係として位置づけられている。

一方で、まだシンボル化されていない感じられた意味をさらにシンボル化する機能的関係が「把握」である。三村 (2011) によれば、「メタファー」における新しい感じられた意味の創造は「比喩表現を読んだり聞いたりしたときに限られる。しかしメタファーを用いる詩人などは、独特の仕方でも感じられている felt meaning を表現するため、独自のメタファーを作り上げる。この関係を Gendlin は把握と呼ぶ (三村 2011)。

つまり、ECM における機能的関係としての「メタファー」は、あるメタファーを見聞きした際、例えば「私の恋人は赤いバラだ (My love's like a red, red rose.) (Gendlin 1962)」という

メタファー<sup>1)</sup>を読んだときに、メタファーの主題である「私の恋人」に含まれる古い意味と喩語である「赤いバラ」に含まれる古い意味が互いに影響を受け、新たなシンボル化のために用いられることによって、感じられた意味が創造されることを指す。

それに対して、詩人 (でなくても誰も) が感じている、ある独自のニュアンスを何かに喩えようとして、例えば「私の恋人は赤いバラだ」というメタファーで表現した場合には、「メタファー」ではなく「把握」という機能的関係が適用される。つまり、メタファー表現を創造することは、ECM では「メタファー」とは捉えられないのである。

「把握 (comprehension)」は「理解」とも訳出できるが、例えば「私の恋人は赤いバラだ」というメタファーを読んだ際の機能的関係は「メタファー」であり、この「私の恋人は赤いバラだ」というメタファーの意味を理解しようとして、新たにその意味を「美しいが棘がある」という言葉で捉えようとする際の機能的関係は「把握」となる。「メタファー」と「把握」はこのように、感じられた意味を創造し、その感じられた意味をさらにシンボル化するプロセスにおいて相補的に機能しているのである。

## 2. LBD のメタファー観

### (1) 概略・成立経緯

LBD はフォーカシング考案後の 1986 年に出版されたもので、原題を直訳すると「あなたの身体にあなたの夢を解釈させよう」となる。LBD は巻末に2つの付録 (appendix)、A「生きている身体と夢についての理論」と B「それぞれの質問の用い方」が収録されている。本論文で取り上げるこの付録 A について、末武 (2009) は『『体験過程と意味の創造』と『プロセスモデル』(その草稿はすでに 1981 年には書き上げられていたが)をつなぐ重要な概念や理論的モチーフによって展開されている注目すべき論考」と指摘しているが、ECM や CD は異なり、LBD は

Gendlin (1997) の “*A Process Model*” において Gendlin 自身による略称が提示されていない。そのため BLD という略称は筆者によるものである。

付録 A は 35 の節からなり、前半 (1～14) が「生きている身体」、後半 (15～35) が「夢」というサブタイトルで区分されている。前半と後半は議論としては連続しており、身体の機能の観点から言語の機能や夢について論じられている。本論文で取り上げるメタファーに関する議論は、付録 A 後半の夢に関する節で登場する。また筆者が調べた限り、この LBD の付録 A は、後に取り上げる Gendlin のメタファー論を特徴づける用語である「交差 (crossing)」について言及された最初の公刊物である。

## (2) LBD のメタファー観

LBD では、夢の暗号的なはたらきを捉えるために、言葉のはたらきを捉え直すことから始める。夢はメタファー的に語りかけるが、日常的な言葉も本来的にはメタファー的に機能する。Gendlin はメタファーの語源が「進展 (carrying further)」であることに触れ<sup>2)</sup>、「メタファー的な進展とは、言葉のはたらき方のことである。古い言葉はいかなる時も新たに使われるようになる (Gendlin 1986, p. 150)」と指摘する。夢もまたメタファー的に生み出されるものであり、Gendlin は夢のもつメタファー的な機能に注目する。

また LBD では、メタファーの機能から言葉と状況との関係に言及される。「メタファーとは“単に”言語的なものではない。言葉は状況を変化させる。新しいメタファーは状況を新しい仕方に変化させる (Gendlin 1986, p. 150)」。メタファーの状況を進展させる機能に注目することで、Gendlin は、夢のメッセージの状況を進展させる力に注目する。

メタファーが状況を進展させる仕方について、Gendlin は以下のように記述する。

A metaphor brings the word's old

situations into a new situation. The two contexts “cross” and form something new. Any two things can be further “crossed” (Gendlin 1986, p. 150).

引用のように、LBD でメタファーはある言葉の古い状況を新しい状況へともたらすように機能すると説明される。古い状況と新しい状況の 2 つが交差することで、新しい何かが形成される。これが LBD におけるメタファーが状況を進展させる機能の仕方である。

また Gendlin は、引用のように、いかなるものでも交差させることができると主張し、その例として「あなたの怒りはどのようにイスと似ているだろう？」という問いかけを挙げている。実際に怒りを感じながらイスとの関連に想いを巡らせると、そこには何らかの類似性を発見するかもしれない (“そこに居座っている”や“誰かに投げつけたくなる”や“私を固く支持してくれる”など…)。この怒りとイスの類似性は、まるでそう関連づける前から“存在していた”ように捉えられがちであるが、「実際にはたった今それらを交差することによって生み出された (Gendlin 1986 p. 150)」ものである。

LBD では、「交差 (crossing)」の概念を「精巧に関連している有機体的なプロセス (Gendlin 1986, p. 150)」を捉えるために用いている。日常体験の中ではイスはあくまでイスであり、怒りも怒り以上のものではない。しかし、古い状況を新しい状況へと関連づける交差のはたらきによって、イスの特徴は怒りに対して精巧に適合され、イスと怒りの間には新たに精密な関連が創造されるのである。

## 3. CD のメタファー観

### (1) 概略・成立過程

CD は、まず 1991 年に “*Subjectivity and the Debate over Computational Cognitive Science*” に掲載された後に 1995 年に “*Minds and Machines*” 誌に再収録された。そのため、

Gendlin (1991) の“Thinking Beyond Patterns”にも「印刷中 (in press)」として引用されている。

CD では、Wittgenstein, R. の後期言語哲学や、Lakoff, J. や Johnson, M. らの認知言語学におけるメタファー論を参照しながら、Gendlin 自身のメタファー論が展開されている。The Focusing Institute サイト内の“Gendlin Online Library”における Philosophical Topics “All word use is metaphor: Theory of Metaphor”に挙げられているのは、2015 年 1 月現在では CD のみである。また CD 以降の論文でメタファーに言及される際にも CD がレファレンスとして頻繁に挙げられていることから、Gendlin のメタファー論における CD の重要性がうかがえる。

## (2) CD のメタファー観

CD ではメタファーを、言葉の様々な使い方を指す「言葉の使用群 (word's use-family)」とその言葉が実際に使われる現在の「状況 (situation)」との「交差 (crossing)」という観点から捉える。Gendlin が「言葉の使用群」は Wittgenstein の「家族的類似性 (family resemblance)」を援用したもので、様々な状況における言葉の使用がもたらす意味の類似性のことである (Gendlin 1991/1995)。また、ある状況がもつ複雑さは、その状況と相互作用する身体感覚として直接的に感じられる。この状況についての意味感覚が、フォーカシングでも重要な用語であるフェルトセンスと呼ばれるものである (Gendlin 1991/1995)。

CD における交差とは、あらゆる言葉の使用において生じうる、状況と言葉の間の創造的な関係性を指す概念であり、フェルトセンスによって現在の状況と言葉の使用群が相互作用し、言葉の意味が理解されることである。Gendlin (1995) によれば、このような言語の創造的な側面に着目した研究領域は、メタファーという特殊例の研究のみであった。そのため、CD では言語の創造的な機能の例としてメタファーを取り上げている。

この交差の概念から、Gendlin は従来のメタファー論に関する 4 つの修正点を挙げている (Gendlin 1991/1995)。本論文では、以下に引用する第 1 の修正点に注目する。

Classically, metaphor was said to be a crossing between two single situations. My first modification of the theory is to argue that there is only one single situation, the new one. The so-called old situation is not actually a single situation, but rather the whole use-family. The word brings all of its many, many old uses into this new situation. What crosses are not two situations, but a use-family and a situation (Gendlin 1991/1995).

引用のように、Gendlin は従来の古典的なメタファー理論がメタファーを 2 つの状況の間の交差と捉えているのに対して、実際には状況は 1 つであると修正している。これまで古い状況と呼ばれてきたものは、実際に状況ではなく、言葉の使用群全体を指すという。ある言葉がこれまでに有してきた非常に多くの言葉の使用群を、現在の新しい状況へともたらすことで、メタファーは意味を成すと捉えられる。

CD で挙げられている「あの娘はバラだ (She is a rose.) (Gendlin 1991/1995)」というメタファーを例に説明しよう。「あの娘はバラだ」というメタファーの意味を、従来のメタファー論は、「あの娘」という言葉が指し示す状況と、「バラ」という言葉が指し示す状況という 2 つの状況の交差として捉えていた。この場合、メタファーの主題である“あの娘”が新しい状況であり、喩語である“バラ”が古い状況となる。

一方、CD のメタファー観では、メタファーは言葉の状況と使用群との交差であり、従来のメタファー論における古い状況が、言葉の使用群として捉え直されている。「あの娘はバラだ」の例で言えば、主題である“あの娘”が話題と



なっているある状況において、“バラ”という多くの使用群を含む言葉が実際に喩語として使用されることで、現在の状況と言葉の使用群が交差し、「あの娘はバラだ」というメタファーは意味を成す。

ECMにおける「私の恋人は赤いバラのようだ」の例でも同様に、CDのメタファー観から説明することができる。“私の恋人”が主題となっているある状況に、“赤いバラ”という言葉が実際に用いられ、その言葉の使用群が状況にもたらされることで、「美しいが棘がある」という“私の恋人”についての新たな理解、意味の創造が成されるのである。

では試しに、主題と喩語を入れ替えて「赤いバラは私の恋人のようだ (A rose's like my love.)」としてみるとどうだろうか。この場合、“赤いバラ”が主題となっているある状況に“私の恋人”という言葉の使用群がもたらされることになる。これによって、“赤いバラ”についての例えば「ひと時も離れたくないほど愛おしい」という理解が可能となる。

この「私の恋人は赤いバラのようだ」と「赤いバラは私の恋人のようだ」という2つのメタファーの意味が異なるのは、それぞれ主題となる状況が異なるからである(ある詩人が恋人への想いを喩える場面か、あるいはある園芸愛好家がバラについての想いを喩える場面か)。CDのメタファー観では、主題と喩語を入れ替えられない理由を、主題と喩語が2つの状況ではなく、状況は主題が指し示す1つのみと捉えることで説明できる。

CDにおける「あの娘はバラだ」のように、メタファーは主題が“あの娘 (she)”という代名詞のような、ある状況を指し示すものであれば成立する。たとえここで“あの娘”と呼ばれているその女性のことを知らなくても、“バラ”という喩語がもたらす言葉の使用群によって、その女性がバラのような女性であることを示すことができる。ただし、その女性がどのようにバラのようであるのかをそのメタファーの聞き手

が理解するには、“あの娘”がどのような女性であるのかという、その状況が共有されている必要がある。

一方で、再び主題と喩語を入れ替えて「バラはあの娘だ (A rose is she.)」というメタファーを作ったとしても、喩語となった“あの娘 (she)”という言葉の使用群が主題に何かをもたらさらない限り、このメタファーは意味を成さない。用いられている意図のわからない言葉を喩語にメタファーを作ることは不可能である。なぜなら、それでは喩語となる言葉の使い方(使用群)から、主題である状況に対して何ももたらさないからである。

ある言葉を、その言葉のそれまでの使用群に含まれる以外の状況で用いることで(“あの娘”や“私の恋人”などの字義通りの意味では植物ではない主題を“バラ”という喩語で喩えることで)、言葉の新しい使い方、つまり新しい意味が創造される(Gendlin 1991/1995)。すべての言語はメタファーの場合と同様に、別の状況で使用される可能性を含んでいる。よって、すべての言語はメタファー的に機能する可能性を有しているのである。

---

## 考察

### 1. Gendlinにおけるメタファー観の進展

以下に、ECM、LBD、CDの3つのメタファー観の推移について考察する。

#### (1) ECMからLBDへ

ECMでは、メタファーは機能的関係の一つとして区分され、あるメタファーを見聞きした際に言葉の古い意味から新しい意味が創造される仕方として言及されていた。一方、LBDではメタファーは古い状況と新しい状況という2つの状況の交差であり、古い状況が新しい状況へともたらされ、新しい何かを形成するように機能すると捉えられていた。

ECMとLBDのメタファー観では、どちらもメタファーの創造性に言及している。またどち

らも古いものと新しいものの関係性に注目し、ECM では古い意味と新しい意味の影響関係から、LBD では古い状況と新しい状況の交差からメタファーの機能を説明する。

LBD のメタファー観ではこのように、メタファーの機能を説明するために「状況」という用語が用いられる。末武 (2009) は『『体験過程と意味の創造』においては、まだそれほど詳細には論じられていなかった身体の機能—特に夢をはじめとしたその隠喩的なはたらき—について、1970 年代以降 Gendlin の考察がより深められていく (末武 2009, p.108)』と指摘しているが、本論文では特にこの「状況」という用語の使用に着目したい。

ECM から LBD への推移としてもう一つ挙げられるのは、ECM のメタファーは観では、メタファーを見聞きする過程とメタファーを作り出す過程が区別されているという点である。ECM において、詩人が「私の恋人は赤いバラだ」というメタファーを作り出す過程は、「メタファー」ではなく「把握」が対応する。一方で LBD では、例えば「私の怒りがどのようにイスと似ているのか」という怒りに対する新たな喩えによって怒りの特徴を理解しようと試みる一連の過程を「交差」という用語で捉える。LBD のメタファー観では、ECM とは異なった観点でメタファーを捉えていることがわかる。

## (2) LBD から CD へ

LBD のメタファー観では、Gendlin (1962/1997) など後の Gendlin の哲学にも見受けられる身体の機能から言語が捉えられており、また交差の概念や言葉の使用への注目など、CD のメタファー観とも共通点が見られる。しかし、LBD と CD という 2 つのメタファー観の間にも推移が見受けられる。それは先述した「状況」という用語の用い方である。

LBD のメタファー観では、古い状況と新しい状況との交差によって創造的な機能を説明していた。しかし、CD のメタファー観で従来のメタファー理論に対する第一の修正点として挙げ

られていたのが、この「2 つの状況の交差」という観点なのである。CD のメタファー観から言えば、メタファーは 2 つの状況の交差ではなく、現在の新しい「状況」と、LBD では古い状況と捉えられていた「言葉の使用群」との交差として捉え直される。

実際には CD の文中で LBD が修正対象として挙げられているわけではないが、CD において修正を要すると指摘されている従来のメタファー論には、「2 つの状況の交差」という特徴の当てはまる LBD における Gendlin 自身のメタファー観をも含むことになる。

## (3) Gendlin におけるメタファー観の進展

以上のような、ECM から LBD を経て CD へと至るメタファー観の推移は、メタファーの機能についての理解をまさに「進展」させている。ECM から LBD への推移において、メタファーは状況と関連付けられて論じられるようになり、さらに LBD から CD への推移において、古い状況と捉えられていたものを言葉の使用群と捉え直すことで、2 つの状況の交差という観点から、言葉が用いられる実際のある 1 つの状況という観点で論じられるに至った。このような「状況」という用語のより厳密な使用が、Gendlin のメタファー観を進展させ、メタファーの機能に関する新たな捉え方をもたらしている。

Gendlin は後にある論文の中で「辞書は私の状況を知らない (The dictionary doesn't know my situation.) (Gendlin 2012, p.151)」と記述している。辞書には、ある言葉のこれまでの使い方が網羅的に記載されている。しかし、どれだけ詳細にそのような言葉の使用群を記載しても、それだけでは言葉は意味を成さない。そうではなく、言葉は具体的な状況の中で実際に使用され、状況と交差することではじめて意味を成すのである。

CD のメタファー観は、「状況」という用語のより厳密な使用によって、その後も引き継がれる「状況と言葉の使用群の交差」という観点を獲得した。CD のメタファー観は言わば、Gendlin

のメタファー論のレイテスト・バージョンだと指摘できる。

## 2. 臨床的なメタファー観へ

末武(2009)が指摘するように「ジェンドリンにとっては、心理療法の実践、殊にフォーカシングの提案と展開の中で、人間の体験過程や身体を持つ複雑で精緻な機能がよりいっそう重要なものとして認識されていったことは間違いないだろう(末武 2009, p. 107)」。Gendlinはフォーカシングの考案以前にすでに臨床実践に取り組んでいたが、その後の1980年代に、夢という伝統的な臨床素材にフォーカシングを応用する取り組みがGendlinのメタファー観に何らかの影響を与えたのではないかと推察することもできる。

一方で、Gendlinのメタファー論のレイテスト・バージョンであるCDのメタファー観は、Freud以来の伝統的なメタファー観がもたらす臨床観とは異なる視点を与えてくれる。Freudに由来する伝統的なメタファー観では、クライアントの表現や夢の象徴は、クライアントの心的現実や無意識の欲望が、防衛機制や検閲によって歪曲されて表象されている象徴と捉えられ(Freud 1900)、そこでその不完全な象徴としてのメタファーを手掛かりとして、無意識に潜在する本来の意味を解釈しようと試みる必要が生じる。

それに対して、CDのGendlinのメタファー観では、メタファーは「状況と言葉の使用群との交差」から捉えられ、ある状況においてある言葉が用いられることで、その言葉はその状況に独自の意味を成す。つまり、クライアントの表現を、伝統的な精神分析におけるメタファー観のように心的現実に対する何らかの表象とは捉えず、CDのメタファー観はクライアントにとっての実際の状況についてのメタファーとして捉えるのである。

夢の象徴に関しても、ある象徴の意味はその象徴のこれまでの使用群(例えば「蜘蛛は不安

を象徴する」というような民族的・神話的なモチーフとの対応)からのみ決定されるわけではない。CDのメタファー観が示すように、夢の象徴のその使用群が実際の状況と交差することによって、その象徴は独自の意味を成すと説明できる。

なお、精神分析における夢とメタファーの関連は、Freud自身によって言及されたというより、後にLacan, J.がよって夢の作業に典型的な圧縮と置換という2つの防衛機制を言語学的な隠喩と換喩の区別に対応づけて論じたことに由来する(フィンク 2013)。Freud自身によるメタファーへの言及は“*The Interpretation of Dreams*”の後に発表された著作“*Jokes and their Relation to the Unconscious*”(Freud 1905)においてである。この中でFreudは、冗談や言葉遊びの中に見られる治療的な言語機能を考察するにあたってメタファーの機能について取り上げている。

精神分析のメタファー観では、隠喩や換喩など、象徴の表現形式の相違を防衛機制と対応づけ、その対応を象徴解釈に援用しようと試みる。一方でCDのメタファー観では、クライアントの状況とその言葉との交差という観点から、状況の中で実際に用いられているその言葉の意味をクライアント自身がより理解できるように促そうとする。

また、精神分析のメタファー観では、隠喩と換喩などの表現形式に反映される防衛機制をクライアントの生育史や情緒的な発達過程に関連して理解するのに対して、Gendlinのメタファー観では、メタファーによって創造されるクライアントにとっての状況の理解の「新しさ(novelty)」に注目する。Gendlinは、ECMからCDまで一貫してメタファーの創造性に注目している。Gendlinのメタファー観は精神分析のメタファー観とは異なる発想をもち、その臨床実践においてもまた異なる特徴が際立ってくる。

例えば、隠喩と換喩のような表現形式の区別



を病態水準との関連から捉えることがある。『心理臨床大辞典』（培風館）では「クライアントの発することばに換喩が多い時、彼が詩人である場合を除いて、その病態は深いと考えなくてはなるまい。隠喩が多い時は、換喩に比べて病態は軽いが、しかし一定していない（三好 2004, p. 149）」と記述されている。

Gendlin のメタファー論は、まさにここで除かれている詩人の詩作が有するメタファーの創造性に着目している。ある言葉がその状況と交差することで、その状況の理解を進展させる CD のメタファー観は、「人が自身の状況について語り、状況を理解しようと試みる場」である心理臨床の実践において多くの示唆を与えてくれるだろう。

本論文では、Gendlin のメタファー観の進展について概観した。特に、そのレイテスト・バージョンである CD のメタファー観は、メタファーのもつ創造的な機能、そして状況についての理解を進展させる機能に着目するという、従来の臨床観とは異なった臨床的な特徴を有していると指摘できる。

## 結語

岡村 (2013) は、Gendlin が夢との関連から初めて言及し、後にさらに進展させた交差の機能を、日本独自の言葉遊び「なぞかけ」に見出し、それを元に「なぞかけフォーカシング」を考案した。夢や言葉遊び、そしてこの両者を特徴づけるメタファーの機能は、Freud を発端とする伝統的な研究テーマである。かつて精神分析がその臨床観を夢や言葉遊びなどに見出されるメタファーの研究を通して構築していったように、異なるメタファー観は、異なる臨床観、異なる臨床実践を生み出す源泉となる。

本論文では、Gendlin のメタファー観、の進展を明らかにし、そこからもたらされる臨床的な特徴について言及した。今後の課題として、Gendlin における「状況と言葉の使用群の交差」

というメタファー観がもたらす臨床観や、そのような臨床観を踏まえた具体的な臨床実践の在り方について、さらに明らかにしていく必要があるだろう。

## 付記

本論文を作成するにあたり、ご指導を賜りました関西大学大学院心理学研究科の池見陽教授に御礼申し上げます。また本論文の論旨を整理する上で、関西大学大学院心理学研究科の田中秀男氏による緻密な先行研究や、田中氏との特に ECM についての議論から多くの示唆を得ました。記して感謝申し上げます。

## 註

- 1) 感じられた意味とシンボルとの機能を重視する ECM のメタファー観では、「～のようだ」という表現を含む直喩 (simile) と、そのような表現を含まない隠喩 (metaphor) を区別せず、両者は同様の機能をもつと捉えられる (Gendlin 1962/1997, p. 114)。そのため、“My love’s is like a red, red rose” という直喩表現もメタファーとして捉えられる。
- 2) ここで「進展」と訳出したのは“carrying further”だが、CD やそれ以降の Gendlin の論文は主に“carrying forward”という表現に「推進」や「進展」の訳語をあてている。本論文では“further”と“forward”を区別しないが、このような用語の変化が Gendlin の理論展開の理解にさらなる示唆を与える可能性があることを補足しておく。

## 文献

- Barker, P. (1985): *Using Metaphor in Psychotherapy*. Brunner, Mazel Inc.
- フィンク, B. (2013): 後期ラカン入門 村上靖彦 (監訳) 人文書院.
- Freud, S. (1900/1953): *The Interpretation of Dreams. The Interpretation of Dreams. Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud. Vol. 4-5*. Stachey, J. (Trs. & Ed.) London, Hogarth Press.
- Freud, S. (1905/1960): *Jokes and their Relation to the Unconscious. The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud. Vol.8*. Stachey, J. (Trs. & Ed.) London, Hogarth Press.
- Gendlin, E. (1962/1997): *Experiencing and the Creation of Meaning*. Evanston, Northwestern University Press.

- Gendlin, E. (1981): *Focusing*. New York, Bantam Books.
- Gendlin, E. (1986): *Let Your Body Interpret Your Dreams.*, Chiron, Wilmette, IL.
- Gendlin, E. (1995): Crossing and dipping: some terms for approaching the interface between natural understanding and logical formulation. *Minds and Machines*. 5 (4): pp.547-560. (Gendlin, E. T. (1991): Crossing and Dipping: Some Terms for Approaching the Interface between Natural Understanding and Logical Formation. M. Galbraith and W. J. Rapaport (Eds.) "Subjectivity and the Debate over Computational Cognitive Science" (pp. 37-59). Buffalo State University of New York, Center for Cognitive Science.)
- Gendlin, E. (1997): *A process model*. New York, The Focusing Institute.
- Gendlin, E. (2012): Implicit Precision. Radman, Z. (Ed.) *Knowing without Thinking: The Theory of the Background in Philosophy of Mind*, Basingstoke: Palgrave Macmillan. pp.141-166.
- Ikemi, A. (2005): Carl Rogers and Eugene Gendlin on the Bodily Felt Sense: What They Share and Where They Differ, *Person-Centered and Experiential Psychotherapies*, 4(1): 31-42.
- 三村尚彦 (2011): そこにあって、そこにはないもの—ジェンドリンが提唱する新しい現象学—『フッサール研究』9: 15-27.
- 三好暁光 (2004): 健康と病態『心理臨床大事典 [改訂版]』培風館 pp.149-151.
- 岡村心平 (2013): なぞかけフォーカシングの試み—状況と表現が交差する“その心”—『サイコロジスト: 関西大学臨床心理専門職大学院紀要』3: 1-10.
- Rennie, D. L. (1998): *Person-Centred Counselling: An Experiential Approach*. London, SAGE Publications.
- Stott, S., Mansell, W., Salkovskis, P., Lavender, A. (2010): *Oxford Guide to Metaphors in CBT: Building Cognitive Bridges*, USA, Oxford University Press.
- 末武康弘 (2009): 臨床的問題としてのジェンドリン哲学 諸富祥彦 (編)『フォーカシングの原点と臨床的展開』岩崎学術出版 pp.89-146.
- 田中秀男 (2005): ジェンドリンの初期体験過程理論に関する文献研究 (下): 心理療法研究におけるデイルタイ哲学の影響 図書の譜『明治大学図書館紀要』9: 58-87.
- Worsley, R. (2012): Narratives and lively metaphors: Hermeneutics as a way of listening. *Person-Centered & Experiential Psychotherapies*, 11(4): 304-320.
- 吉本雄史・中野善行 (編) (2004): 無意識を活かす現代心理療法の実践と展開 メタファー／リソース／トラ

ンス 星和書店.